

分離派 100 年研究会 連続シンポジウム 第 1 回

「分離派」とは何か―分離派建築会誕生 100 年を考える

特別展示：東京大学所蔵分離派建築会メンバー卒業設計図面（会場エントランス）

2016 年 10 月 30 日（日）東京大学工学部 1 号館 15 号講義室

【開催趣旨】

「過去建築圏」からの分離を求めて東京大学を卒業する学生たちが分離派建築会を結成して、まもなく 100 年を迎える。この運動は、20 世紀への世紀転換期ヨーロッパ美術界におけるアカデミズムからの分離運動に刺激されて、建築における芸術性の解放を目指した若者たちによる瑞々しい運動として、近代建築の歴史に刻まれている。

本シンポジウムを起点とする一連の企画は、分離派建築会発足 100 年を見据えて、現代建築に通じる重大な岐路のひとつであったこの運動の実態と意味とを問い直すことを目的としている。その端緒として、今回は、ヨーロッパにおける分離派（Secession / Sezession）と日本の分離派建築会のあいだにある西洋と日本との距離、美術と建築との距離を問い、分離派建築会をめぐるコンテクストを探ることにする。それによって、近代建築運動が孕んでいた問題と可能性を再考する機会としたい。

【プログラム】

13:00－13:10

開 会：加藤耕一（東京大学 准教授）

趣旨説明：河田智成（広島工業大学 教授）

【第 1 部】 各論発表

(1) 美術界における分離派

13:10－13:40 発表 1：池田祐子（京都国立近代美術館 主任研究員）

「分離派の誕生 ― ミュンヘン、ウィーンそしてベルリン」

13:40－14:25 発表 2：水沢 勉（神奈川県立近代美術館 館長）

「分離派と日本美術のモダニズム ― 鏡像として、分光として」

14:25－14:35 休憩

(2) 分離派と建築

14:35－15:05 発表 3：河田智成（広島工業大学 教授）

「分離派の建築的背景 ― ゼムパーからヴァーグナーへ」

15:05－15:50 発表 4：足立裕司（神戸大学 名誉教授）

「アーツ・アンド・クラフツ運動以降の西欧の動向と日本への影響について ― 武田五一の活動を中心として」

15:50－16:00 休憩

【第 2 部】 討 論

16:00－16:15 コメント：福田晴虔（九州大学 名誉教授）

16:15－17:30 討論：「分離派」とは何か

パ ネ ラー：池田祐子・水沢勉・河田智成・足立裕司

モデレーター：田所辰之助（日本大学 教授）

閉 会：田路貴浩（京都大学 准教授）

【発表要旨および講師略歴】

◇ 発表 1：分離派の誕生 ― ミュンヘン、ウィーンそしてベルリン

「Secession/Sezession」という語は、よく知られているように、古代ローマにおいて経済的対立の緊張が高まると民衆の一部が聖なる山ないし丘に上り、為政者たちに第二のローマを設立するという脅しをつきつける民衆離反（secessio plebis）と呼ばれる行動に由来する。そしてこの言葉は、19 世紀の半ば以降、社会の急激な近代化に伴って世界各地で起こった政治的対立運動を示す際に頻繁に用いられた。政治用語としては「分離主義」と訳されるこの言葉を、20 世紀を目前に、既成の芸術界から離反し新たな芸術のプラットホームの創成を目指した人々が、自らに冠するようになる。それが「分離派」である。

本発表の目的は、第一に、19 世紀末に誕生した「分離派」を冠する団体が、どのような背景のもとで、どういった目的をもって誕生したかを概観することにある。中でも中心となるのが、1892 年設立の「ミュンヘン分離派」、1897 年設立の「ウィーン分離派」そして 1898 年設立の「ベルリン分離派」であり、本発表でもこの三団体を採り上げる。また、「分離派」を冠した団体に共通する活動目的のひとつに、新しい芸術の在り方を目指し志を同じくする人々による国内外のネットワーク構築がある。にもかかわらず、各団体の活動の在り方は一様ではない。本発表の第二の目的は、ミュンヘン・ウィーン・ベルリンの各分離派の活動に見られる特徴とその違いを明確にすることにある。しかしこの分離派の活動も、「新分離派」が登場してくるなど、1905 年を過ぎる頃から早くも転機を迎える。発表の最後では、各地の活動の転機とその後に台頭してくる芸術の動向との関係について簡単に触れた後、本来は活動方針に由来する「分離派」という名称が、1910 年には一般的にも「Sezessionsstil（分離派様式）」として様式概念に組み込まれるようになった要因がどこに見いだせるのかを考えてみたい。

池田祐子（いけだ・ゆうこ）

京都国立近代美術館主任研究員。大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士課程後期終了。専門は、ドイツ（語圏）近代美術・デザイン史。最近の論文に、「ウィーン工房―「ウィーン」ブランドの創出とその展開」池田祐子編『西洋近代の都市と芸術 4 ウィーン 総合芸術に宿る夢』（竹林舎、2016 年）、「グロピウス：芸術と産業をめぐる華麗なる一族―ディオリマ、工芸博物館、そしてバウハウス」尾関幸編『西洋近代の都市と芸術 5 ベルリン 砂上のメトロポール』（竹林舎、2015 年）など。

◇ 発表 2：分離派と日本美術のモダニズム ― 鏡像として、分光として

日本の 19 世紀から 20 世紀にかけての前後 20 年間、いわゆる世紀転換期の美術の状況はきわめて興味深いものであった。それは中心と周縁という静的な構図ではとらえきれない複雑な動体としての魅力を放つものであった。それは西欧での展開を反映する「鏡」であると同時に、それとの時差ゆえの独自の様態で分解させる「プリズム」でもあり、そこから他の文化圏ではあまり比較する事例のないような「分光」が発生しているものとして分析を試みたい。

ここでは藤島武二（1867-1943）と新海竹太郎（1868-1927）という油彩と彫塑という日本の近代美術のアカデミズムを代表するふたりの美術家に注目する。それぞれのその時期の代表作である、藤島武二《蝶》（1904）と新海竹太郎《ゆあみ》（1907）を起点として日本的モダニズムの揺籃期を、西欧の世紀転換期の分離派との比較も試みつつ、その特性を析出してみる。それらの作品は、同時期の日本が、アカデミズムの形成期にあったために、対抗すべきアカデミズムへの対抗としての「分離派」という明確な輪郭を持たないものであったとしても、その実質はいうならば「東京分離派」と呼べるような芸術的成果であったといえるのではなかるうか。

そして、それが「絵画」「彫刻」という芸術の範疇を絶対化させるのではなく、むしろ、相対化させている点に

注目し、かれらの図案家としての個性とも密かに連携していることにも言及してみたい。

水沢 勉（みずさわ・つとむ）

神奈川県立近代美術館館長。慶應義塾大学大学院修士課程修了後、神奈川県立近代美術館に学芸員として勤務。2008年、横浜トリエンナーレ2008「タイムクレヴァス」の総合ディレクター。2011年より現職。
主著に、『この終わりのときにも 世紀末美術と現代』（思潮社、1989年）、『美術館は生まれ変わる』（共著、鹿島出版会、2000年、新版2008年）、『モダニズム／ナショナリズム』（共著、せりか書房、2003年）など。

◇ **発表 3：分離派の建築的背景 — ゼムパーからヴァーグナーへ**

ウィーン分離派の建築家たちを指導したオットー・ヴァーグナー（1841-1918）の影響は、日本の建築界にもおよび、分離派建築会発足の背景となった。本発表では、日本において「強烈な芸術の物質主義」と言われ、様式選択による建築を克服する新建築の指針とされたヴァーグナーの建築理論を、彼の建築作品とあわせて、ゴットフリート・ゼムパーが提示した被覆論の流れのなかに位置付けながら、日本のヴァーグナー受容に伏在する問題を探ってみたい。

ヴァーグナーが『近代建築』（1895年）で主張した目的・材料・構造を基盤とする建築観は、『様式論』（1860-67年）をはじめとするゼムパーの建築理論に導かれてのものであった。ゼムパーは、芸術的建築活動を次の二つの段階で捉えた。つまり、技術に即した形態化の段階と、それによって生じる形式を被覆の象徴作用によって精神化する芸術化の段階である。ヴァーグナーは、ゼムパー理論の鍵となっている被覆の象徴作用を批判し、被覆の作用を機能的・倫理的なものに限定することで、技術による形態化の段階を強調して、芸術化の段階を透視図法的視覚効果といった古典的美学に委ねた。しかし、ヴァーグナー後期の建築作品における被覆の扱いには、彼が理論として語った事物としての被覆にとどまらない表現を認め得る。

ヴァーグナーはゼムパーから、被覆によって技術と芸術を一元的に捉える視点を継いでいた。しかし、分離派建築会発足前後の日本でのヴァーグナー紹介に、こうした背景が読み込まれていた形跡はない。そして、ヴァーグナー評価は彼の没後、現代生活に立つ「強烈な芸術の物質主義」の「心」こそが重要であり、「形」に目を向けるべきでないというような、和魂洋才の裏返しとして展開されるようになる。このようなヴァーグナー評価の根にあるものが、ヴァーグナー受容の当時の限界にも表れているであろう。

河田智成（かわた・ともなり）

広島工業大学環境学部教授。九州大学大学院人間環境学研究所博士後期課程修了。博士（工学）。専攻は近代建築史・建築論。主要論文に、「ゴットフリート・ゼムパーからアドルフ・ロースへ—近代初期における建築的統辞法の展開—」（学位論文、1999年）。編訳に、『ゼムパーからフィードラーへ』（中央公論美術出版、2016年）。

◇ **発表 4：アーツ・アンド・クラフツ運動以降の西欧の動向と日本への影響について — 武田五一の活動を中心として**

従来、明治の第二世代の建築家は日本趣味と呼ばれる傾向をもち、欧化主義からの転換を担った世代として評価されてきた。しかし、日本趣味という観点を一旦留保し、武田五一という建築家の足跡と英国滞在中に彼が見聞きしたアーツ・アンド・クラフツ運動と比較するなら、家具から住宅にいたるトータルな居住環境の追求、自国の伝統への拘りや継承、土着的な民家への関心、歴史的建造物の保護など、多くの並行性が指摘できる。

しかしながら、イギリスでのこの幅広い運動の全貌を把握し、その日本への影響を考察することは容易ではない。ここでは武田五一という建築家の足跡を辿ることにより、彼の眼を通じてこの運動がどのように映ったか、

さらに彼がその思想を作品としてどのように反映させていったかを把握することで、日本人建築家がどのようにアーツ・アンド・クラフツ運動を理解したかの一助としたい。

これまでの研究を通じて、彼がアール・ヌーヴォーを廃してヴィーナー・セセッションを評価した理由として語られる、国民性、気候・風土、歴史と伝統、利便性、様式の生成などについての考え方は、多くはイギリスのゴシック復興運動において取り上げられてきた基本的な論点と通じるものがあるということが明らかとなってきた。逆に、こうした建築観は、すでに工部大学校一期生である辰野金吾等の卒業論文にも散見される考え方であり、一人武田五一のものではないともいえる。つまり、アーツ・アンド・クラフツ運動の影響を検討するには、当時並行した動向であり、イギリスにおいて大きな影響力を有していたゴシック復興運動を含めて考える必要があると考えられるのである。

実際、武田五一は「セセッション」と呼ばれる潮流はイギリスの「峨峙式」に発するという一文も残しており、遡れば J.コンドルが日本にもたらした思考法が日本の建築界の底流として定着していったのではないか、という仮説もあながち根拠のない指摘とはいえないように思われる。今回の発表では、「機械対手仕事」といった紋切り型の史観を留保し、むしろ当時の建築家が共有していたと考えられる潜在的な思考法にも注意しながら、武田五一という建築家の建築観と作品を取り上げたい。

足立裕司（あだち・ひろし）

神戸大学名誉教授。神戸大学大学院工学研究科修士課程修了。工学博士。専攻は近代建築史・建築論・保存論。主著に、『武田五一・人と作品』（共著、名古屋鉄道、1987年）、『関西のモダニズム建築 20 選』（共著、淡光社、2001年）、『再生名建築』（共著、鹿島出版会、2009年）など。

◇ **コメント**

福田晴虔（ふくだ・せいけん）

九州大学名誉教授。東京大学工学部建築学科卒業。工学博士。専攻は建築史。主著に、『パツラーディオ —世界の建築家』（鹿島出版会、1979年）、『建築と劇場 —18世紀イタリアの劇場論』（中央公論美術出版、1991年）、『イタリア・ルネサンス建築史ノート』（全3巻、中央公論美術出版、2011-2013年）など。翻訳に、アルド・ロッシ『都市の建築』（共訳、大龍堂書店、1990年）、ジョン・ラスキン『ヴェネツィアの石』（全3巻、中央公論美術出版、1994-1996年）など。

【MEMO】